

八丈島樫立方言の記述 (その1)

まえがき

第1章 樫立の生活の今昔

——主要生活語詞を配して——

青 柳 精 三

ま え が き

筆者は、昭和48年・昭和54年・昭和55年の3回にわたり、八丈島の樫立において樫立方言の臨地研究を実施した。土地の人同士の自然な会話を収録し、音声・文法・語彙の各分野での共時論的記述を行うことが目的であった。

対象とした年齢層を、便宜上、次の4つに分類した。

明治中期生まれ(明治15年～明治30年) 明中と略称

明治後期生まれ(明治31年～明治45年) 明後と略称

大正生まれ 大と略称

昭和初期生まれ(昭和元年～昭和5年) 昭初と略称

また、必要に応じ概括的に、明治生まれを老人層、大正・昭和初期生まれを高年層と呼ぶこともある。

方言の臨地研究の方法は大きく分けて二つあると思う。一つは、あらかじめ土地の人たちから教示を受ける項目やそれぞれの質問法を考慮しておき、その計画された線に沿って行うものである。もう一つは、そのような準備をせず、現地で行われている色々な場面での土地人同士の自然会話を採録し、不明箇所を土地の人に尋ねて解明していくという方法である。前者は、一定範囲の限られた問題についてまとまった研究を、研究者の取扱いやすい形で進めるのに適している。後者は、前者と違い、大げさに言えば、混沌から出発して形あるものを生み出す作業の連続で、苦勞が多く時間もかかる。しかし、その苦勞の反面、利点も多い。即ち、この方法は、生きて動く言語行動の現実態をとらえるのに適するからである。イントネ

ーション・プロミネンス・間投詞・間埋詞・接続詞・たたみかけ連文などが現実に展開する様子は、自然会話において観察すべきものである。また、ある特定表現の頻用に気付かされるのも自然会話を多く聞くことによってである。

本書の研究の出発点は、第2章にかかげる故山本政三氏（明治20年生まれ）と奥山和昭氏（昭和4年生まれ）との間で交わされた約20分の自然会話（MTと略称。Mは山本氏・Tで奥山氏を表わす）である。このMT会話の解明の作業を軸として、^{たかてる}榎立方言の基本構造の概要を把握し、それに他の自然会話の収録・観察・解明を通して肉付けをしていくという方法をとった。後半段階では、榎立方言を自らも用いて質問し、回答者が共通語による干渉をできるだけ受けたくないような環境づくりに努めたこともあった。

記述にあたっては、従来一般に行われている文法用語やその概念にこだわることなく、必要に応じ、かなり大胆に新しい詞類を立てたり、自由な分析と総合の方法を用いたりしている。共通語との対比・他の八丈方言との対比・通時論的な推断は本書の目的とするところではないのでほとんど触れていない。繰り返して言えば、本書の主目的は、老年層と高年層の自然会話資料を軸としての榎立方言の概要の共時論的記述である。

方言生活は、榎立の人間社会生活の一分野を占める。方言生活をとり囲む自然的社会的環境を抜きにして生活語たる方言を語ることはできない。もし方言を単に一つの記号体系として生活から切り離して記述したならば、人間不在の記述となる。方言を語る人々の暮らしの場・暮らしの営み・暮らしの伝統などを頭におき、生活との係りあいの中で方言を見てゆることが人間言語学的な記述と言えらると思う。第1章はそういう意味で冒頭においたものである。また、片仮名表記によって相当数の榎立方言の主要生活語詞を配して、ミニ生活語彙の章も兼ねさせたつもりである。

第1章 樫立の生活の今昔

——主要生活語詞を配して——

1. 樫立の概要——自然と社会環境——

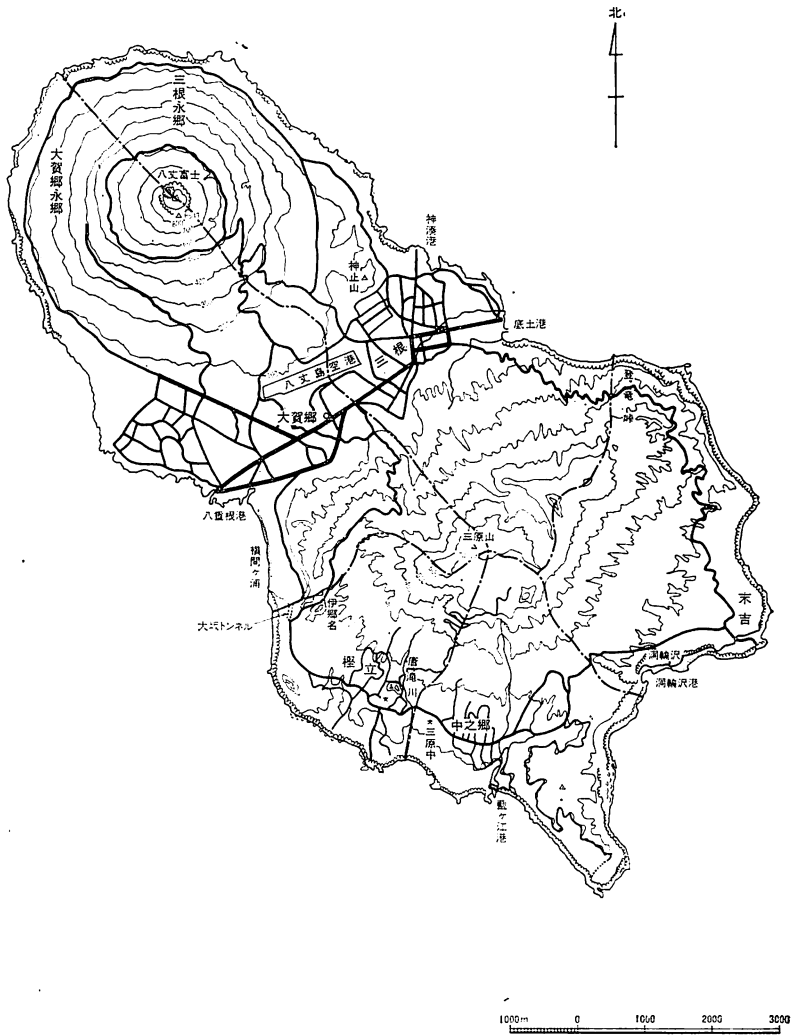
樫立地区は、東京都八丈島八丈町の1地区である。八丈島の大賀郷^{オ-カゴ-ミツ}、三根^ネ、樫立^{カンタテ}、中之郷^{ナカノゴ-}、末吉^{スエヨシ}の5カ村は*、昭和30年4月1日をもって合併し、1島1町の八丈町となった。以後、行政上、村は地区と呼ばれるようになった。

*片仮名の振り仮名は、そのついている語の樫立での発音を示す。またこのようにして片仮名表記された語は、共通語と発音が同じ場合でも、樫立方言語詞であると理解されたい。

樫立地区は八丈島の南部にあって三原山^{ミハラヤマ}の山頂近くから南西の海岸線へ向って傾斜しつつ扇形にひろがっている。面積は7.49 km²。八丈町全体の面積68.33 km²のうち、この地区の占める面積が一番少ない。三原山の頂上附近より中腹にかけては、シーノキ《すだじい、つぶらじい》やマダミ《たぶ》を主体とする常緑広葉樹林や、ヒャーノキ《おおばやしやぶし》の林等で覆われている。中腹から畑がある。山裾をカーブを描いて幅6.5 mの舗装道路が走り、バスが通じている。道路の周囲に集落がひろがっている。海岸はおおむね切り立っている。気候は、近くを流れる黒潮の影響で冬も比較的温暖である。1年を通じて多雨で冬はフユニシ《西風》が強い。

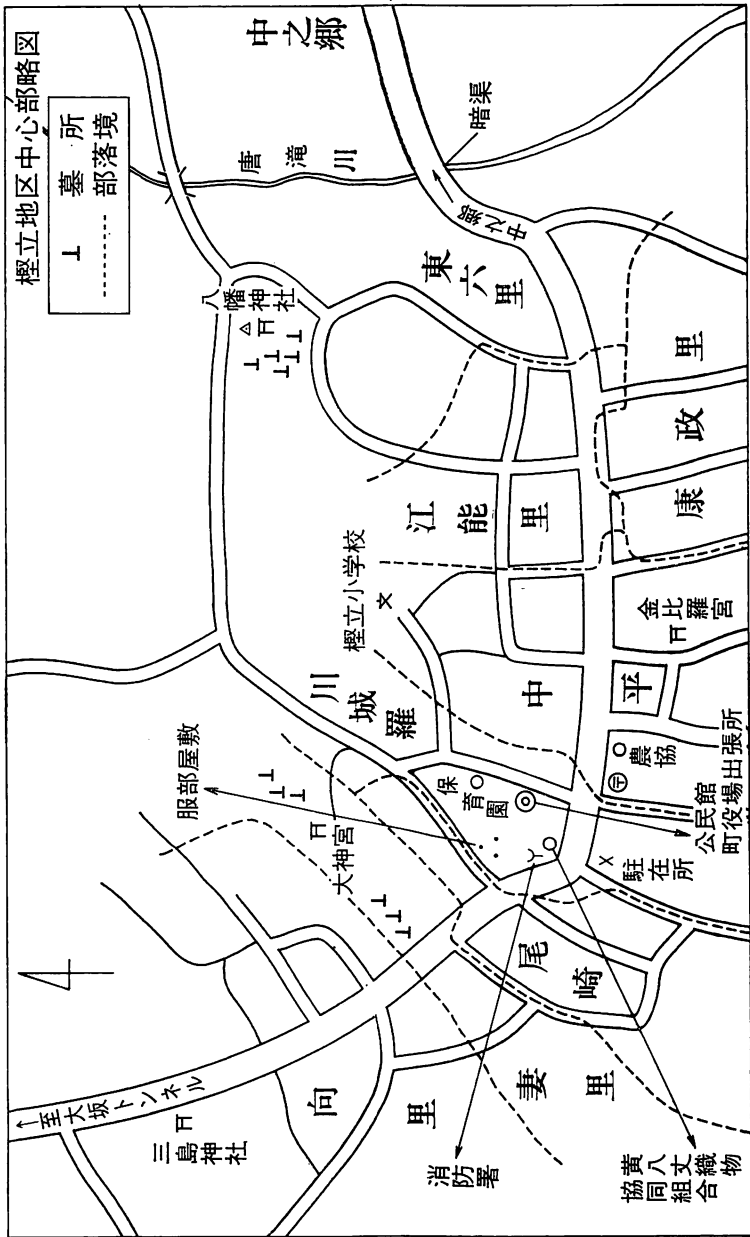
樫立地区は現在9ブラク《部落(耕地とも)》で構成されている。9部落の名称と世帯数は次の通りである。伊郷名^{イゴ-ナ} 6世帯。向里^{ムカイザト} 34世帯。妻里^{ツマザト} 29世帯。尾崎^{オサキ} 21世帯。川城羅^{カワジローラ} 40世帯。中平^{ナカダイラ} 32世帯。江能里^{エノザト} 34世帯。康政里^{ヤスマザト} 61世帯。東六里^{ト-ロクザト} 24世帯。なお、高年層以上の人々は、向里をムキヤート、妻里をツマート、川城羅をクワジローラ、中平をナカジャーロ、康政里をヤスマート、東六里をト-ロク、伊郷名をイゴ-ノァと呼称する。また、伊郷名部落のみは他の8部落と離れ、大坂トンネルの近くにある。以前は向里の隣に井戸川^{イドグワ}部落があったが、現在は向里の一部になっている。

樫立地区の人口は、昭和55年1月1日現在で、男子376人、女子406人で



第1図 八丈島

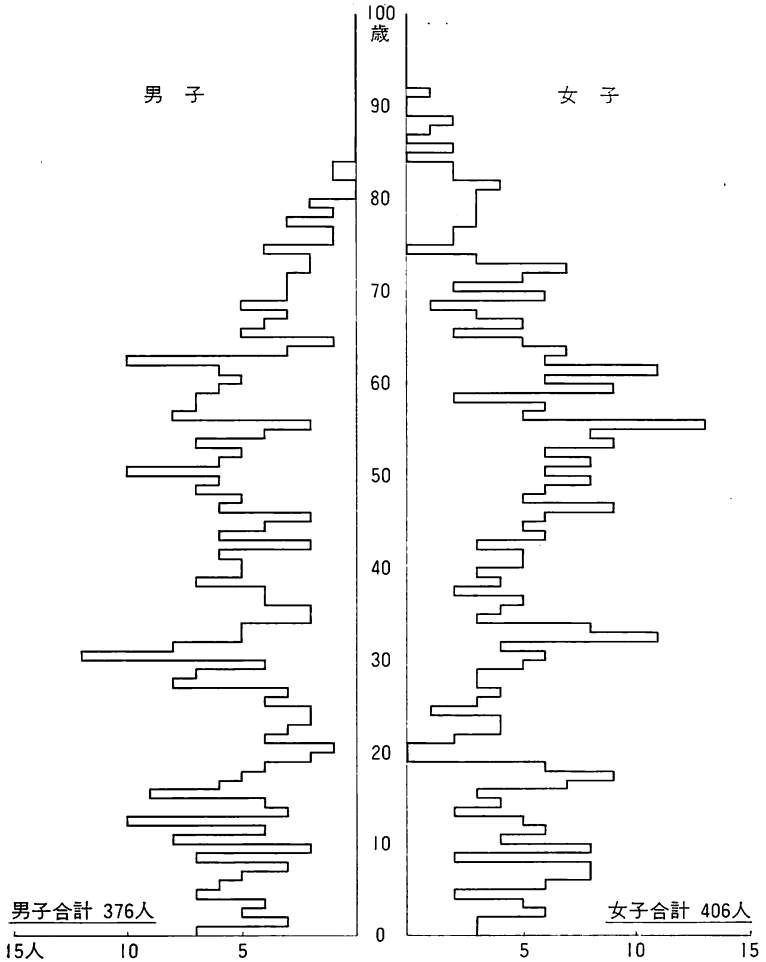
--- は地区境界を示す。



第2図 榎立中心部。部落及び公共施設等の位置 (『八丈島史』P.647の図を基に作成)

年齢別人口構成図

昭和55年1月1日現在



第3図 檜立の年齢別人口構成図
(八丈町役場檜立出張所の資料に基づき作成)

ある。p.6 に年齢別人口構成図を示す。

2. 檜立の産業

—その現状と変遷—

1) 農業

漁港を持たない所から、従来、檜立は純農村であると言われてきた。そこで筆者は、昭和55年1月檜立を訪れた際、農協で農産物の出荷状況を尋ねてみた。その結果、現在、米・麦・雑穀等は作られていないことと、野菜は4、5軒の農家から出荷されているにすぎないことがわかった。檜立には専業農家が約40軒あり、その大部分は、園芸作物を生産している。その主なものは、観葉植物の鉢物及び露地物、切り葉・切り花類、フリーズアの球根等である。鉢物と露地物は主に、内地から来る業者によって、せりかけられ農協を通じて出荷される。切り葉・切り花類・球根等は、収穫時ごとに東京その他の生花市場へ、個々の生産者から直接出荷される。その外には、ジュース用のパッション¹⁾の果実、シマザケ《焼酎》用のサツマ(古くはジクモ)《薩摩芋》が作られ、直接、島の製造所に売られている。

専業農家の他に、その規模は様々であるが、主に観葉植物の一種であるフェニックス・ロベレニーの切り葉を出荷している兼業農家が100軒以上あるという。向里の専業農家の佐々木文一氏(大正5年生まれ)は、次のように述べている*。

*以下の談話の片仮名音声表記において、仮名文字の下に○が付されている場合は母音の無声化、×がついている場合は母音の脱落を示す。

コッチノ ヒャクシヨ[○]ーツテ イツテモ カモモノー ツクル ヒャ[○]
クシヨ[○]ージャ ナク、ダイタイ キリバ。マニャー コメダー ムギ[○]
ダー サツマダー ツクツチャー アノ[○] セーカツワ デキンノー
ジャ。ムカシワ ツクツテ イタガ。ミンナ クニノモノオカ カ
ツテタベタレ。タイチェ[○]ー キリボア[○] シテアル ダロー。

こちらの百姓と言っても、食べ物を作る百姓ではなく、大体ロベレニーの切り葉〔を生産している〕。今では、米だ麦だ薩摩芋だと作ってはいは、生活はできない。昔は作っていたが。〔今では〕みんな、内地のものを買って食べている。大抵切り葉をしているでしょ

う。(キリバとは、①出荷用に切り取ったロベレニーの葉。②ロベレニーの葉を切り、出荷するまでの仕事を意味する語である。ロベは、元来フェニックスロベレニー *Phoenix roebelenii* の略称であるが、現在八丈全島で用いられている日常語であり、重要な生業語詞となっている。)

以下、今日の樫立を含め全島でロベは最も重要な農産物であるから、詳しく紹介しておこう。フェニックス・ロベレニーはシンノウヤシの名でも知られている。印度支那、アッサム原産の単幹矮性種のヤシで、雌雄異株である。単幹から、8~23 cmの多くの小葉羽片から成る30~60 cmの光沢のある濃緑の葉が、多数、弧を描いて四方に広がり、美しい形を呈する。種子を播いてから60 cm位の株になるまで数年かかり、3尺物(約90 cmの高さ)の成株を得るには、8~9年の手入れが必要である。その間、切り葉を収穫しながら最後に鉢物、又は露地物として、成株を出荷する。鉢上げは5月中旬頃より8月中旬頃までに行われて、翌春の出荷期までヨシズ、しの竹等で遮光した鉢置場で管理される。ロベが初めて八丈島にもたらされたのは、1920年(大正9年)で、八丈島に農場を持っていた横浜植木会社によって、雌株と雄株の2株が植えられた。これを親株として、全島に広がったといわれている。当初各所で試験的に栽培されると、ロベは八丈島の気候・土質に適したため、露地で見事に生育した。又、土質の関係で、樫立、中之郷、末吉の坂上三地区の方が、三根、大賀郷の坂下二地区におけるよりも、株の伸長が速かった。

太平洋戦争前までに、ロベの営利栽培は徐々に行われるようになっていったが、戦中及び終戦直後には食糧難のために、かえり見られなかった。しかし世情が安定するにつれ、観葉植物ブームが起こった。しかも、需要先の都会地ではスペースの関係で、カナリーヤシなど大型なものは敬遠され、小型で耐久力に富むものが望まれ、ロベはその要求を満たすものであったので、需要が拡大した。昭和46・47年頃、価格が安定せず、園芸栽培の前途が危ぶまれた事もあったが、石油ショック後の燃料費の急騰は、ロベを露地で栽培し得る八丈島には幸して、現在は盛んに生産出荷されている。また、ロベは四季を通じ、切り葉の収穫が可能なので、最近鉢物よりも切り葉に力を入れる農家が増えている。

妻里の矢畑たまをさん(明治30年生まれ)は、キリバについて次のように語っている。

ヤマダケ ハタラクシトワ ロビー タクサーン ナバテ ウロシト
 モアル。キリバガ アルシトワ ヌー ハヤ ゴジューオ トースト
 ハヤ キリバヤ アニカデ ノア。キリバデ ヨッポド カセグ ダ
 ロー。ゴマン ジューマンテッテ ヒトツキニ。

畑だけ働く人〔専業農家〕の中には、ロベをたくさん植えて、〔株として〕売る人もある。切り葉がある人〔＝ロベがすでに植えてあり切り葉を収穫できる人〕はね、50歳を過ぎるともう、〔労働が比較的きつくない〕切り葉や何かで〔稼ぐわけだ〕ね。切り葉でよっぽど稼ぐでしょう。ひと月に5万、10万で。

現在行われている、切り葉の収穫・出荷作業について簡単に述べておこう。切り取ってきたロベの葉は、バラトリ《とげ取り》をする。次いでバラトリの終わったものを積み上げておき、1本ずつ手に取り鋏で痛んだ葉先を切り、形を整え、大きさを揃えて10本ずつ束ねる。出荷する束の重量が全部で6kgまでの場合は、普通小包として郵便局から、6kgを越える場合は、適宜段ボール箱に詰めて運送業者を通し、船で内地の各地にある生花市場に送る。代金は、量、品質、相場で決められ、計算されて、後日生花市場から送られてくる。ロベの切り葉は、切花・蘭等の高級温室物と違い、傷みがおそいので航空機で送られる事は稀である。

現在ロベは、タバラ《水田》を潰した跡やサチー《永久畑》、ニヤシヨ《屋敷の中にある畑》、道路のシェギ《端》等に植えられている。また以前ヤマシヨ《切替畑》であった所に植えられている場合もある。

檜立地区には平坦な農地が少ないため、部落より高所にある三原山山腹の林、コシ《海岸の崖》近くの雑木林等が切替畑として利用されていた。薪作り・炭焼きと畑作とを組み合わせた特殊な切替畑農法が、戦後まで営まれてきたのである。切替畑農法の実際を、中平の矢田惣八氏（大正7年生まれ）、川城羅の奥山和昭氏（昭和4年生まれ）の説明に基づいて、述べてみよう。

切替畑農法は、コワリー（コワリエとも）*→アラシヨ→フルシヨ→フッチロ→コワリーのサイクルで営まれる。コワリー《木々が成長して伐採できる段階に達している林で、散り積った落葉のため地味が肥えている場所》の木を伐って炭に焼く。ゴミ《薪》にする場合もある。その切り株はよほど邪魔な場合は掘り起こすが、普通は切れるだけの根を切り、そのままにして置き、笹等の下草を焼き払う。跡地を耕して、イモ《里芋》、ジャ

一コ《大根》，ショーガ《しょうが》，マグサ《八丈すずき。牛の飼料等に利用する》等を作る。4月頃木を伐採すると跡はイモシヨ《里芋畑》となり，8月頃木を伐採すると跡はジャーコジヨ《大根畑》となる場合が多い。こうして作られた1年目の畑をアラシヨと呼ぶ。2年目になるとその畑はフルシヨと呼ばれ，やはり上記の作物を作る。切替畑には施肥はしないので3年目には作物の出来は悪くなる。一方，畑の処々に放置されていた切株は，ヒャーノキ《おおばやしあぶし》の場合であれば腐ってしまうので邪魔にならない。そこで，また新たにヒャーノキの苗等を植える。ただし，シーノキ《すだじい，つぶらじい》林であった場所では，切り株から必ず芽が出るので植林を必要としない。苗木の間には，マグサを植えることもあり，木々が成長するまで7～8年の間はその場所でマグサや下草を刈り牛の飼料とする。この段階の切替畑をフッチロと呼ぶ。木々が成長し，下草があまりにはえなくなると，草刈りは行わず放置しておく。この間は4～5年で，やはりフッチロと呼ぶ。木々の成長が進み，伐採可能となると，その林はまたコワリーとなるのである。

*へを付された仮名文字は，その母音が音節副音となって後続の母音と合して二重母音を形成することを示す。エは狭い[e]を示す。したがって，リエは[ri⁺e]である。

現在は，この農法は行われておらず，ロベ等が植えられていない場合の，元の切替畑は，放置されて，ヒャーノキ等の林となっている。

2) 黄八丈織物

切り葉と並んで，現在の檜立の産物で特記すべきものは，黄八丈織物である。黄八丈織物は主に中年以上の婦人達によって，各家庭で織られている。織機は木製の^{たか}高機*で，檜立ではハタモノと呼ばれている。檜立地区のそここで聞こえるトントン，トントンという^{はたおと}機音は，檜立が織物の里であることを印象づけている。

*平仮名による振り仮名は共通語としての発音を示し，檜立生活語詞としての発音ではないことを示す。

黄八丈織物には，オビ《正絹の織り帯》とタンゴ《丹後。(正絹八丈織りの着物地のこと)》がある。草木染のキ《黄》，カバ《樺》，クロ《黒》の糸を組み合わせて，縞や格子の模様を織り出す。^{ヒラオリ}平織のものもあるが，^{アヤオリ}綾織で模様を更に浮き出させたものが多い。黄八丈織物は，江戸時代以前

から明治42年に至るまで、租税として上納されてきた。貢納の外にも江戸時代後期からは、八丈島産唯一の商品として島の経済をささえた時期もあった。榎立には、黄八丈織物協同組合があり、約90名の榎立地区の婦人が、中之郷地区の十数名の婦人と共に、これに加入している。組合長の峯元勝太氏（明治37年生まれ。織り手たちからはカツタサンと呼ばれ信頼を一身に集めている）の語る榎立に於ける黄八丈織物の昭和の歩みを紹介しよう。

すでに大正期から黄八丈織物の生産は衰退の一途をたどっていた。内地において高性能の織物機械、化学染料が開発され、安価で高級な絹織物が量産されていたので、それに押されて、黄八丈織物の需要が減少したためと推察される。峯元氏が家業を継いで黄八丈の販売を始めた昭和4年頃には、榎立地区では養蚕が盛んであった。片倉製糸がヨーサンキョーシ《養蚕教師》を派遣するなどして力を入れ、イトメヤー《糸繭(黄繭)》1貫目（ほぼ布地一反分の生糸が取れる）に付き1円20銭で買い上げていた。一方、黄八丈織物の生産と販売はあまり振るわなかった。峯元氏が黄八丈の反物を背負って、東京の馬喰町、人形町界限に売りに行き、一反7円～8円には売りたいと思っても、4円50銭にしか売れなかったと言う。昭和5～7年には、生産・販売ともに最低となってしまった。

そのような時期に来島した東京三越デパートの担当者は、「八丈織の黄染^{キソ}めのうちでもくすんだ色調のものが国防色（カーキ色）に近いから、この色調のものなら時局がらよく売れるのではないか」と峯元氏に進言した。峯元氏もこれに賛同し、三越側で考案した図柄を織り手に配った。現在のものよりも品質が劣ってはいたが、一応三越の要求に合うものを織り上げることができ、昭和8年から取り引きが始まり、昭和11年まで、生産が次第に増加していった。

しかし昭和12年に入ると、絹糸が統制品となった。黄八丈織物の販売に積極的だった仕入担当者も出征してしまい、三越との取り引きができなくなった。その後は、日本橋の一卸問屋に僅かに卸していたが、太平洋戦争が始まりこれも中止となった。ここに至って、販売を目的とした織物の生産は完全に止まった。

戦後、養蚕は復活したものの、黄八丈織物はあまりかえりみられず家用に織られていたにすぎなかった。昭和34年に八丈温泉ホテルが榎立に開業し、ホテル内の売店で、土産物として、家用に織られた反物を販売し

たところ好評であった。そこで、反物を織る人が次第に増えてきた。当時は、染料は化学染料を用い、規格もなく、価格はまちまちで、一反ごとに売店へ委託して販売されるという有様であった。この状況を改善すべく昭和40年、黄八丈生産組合が結成され、峯元氏が組合長に就任した。そして、①化学染料の使用中止と古来の草木染の復活、②規格の統一、③原価計算に基づく価格の適正化、の3つを主眼として活動を続けた。その間、出資金を積み立ててゆき、昭和49年、生産組合は公認の黄八丈織物協同組合となり今日に至っている。

組合員が、織り上ったオビ《帯》、タンゴ《着物地》を組合事務所にとどけるとその場で、組合は現金で、生産品を買い上げる。この即金買い上げ方式は、組合員の要望によって実施されている。組合では小売りはせず、島内、内地の取り引き店へ卸している。なお昭和52年、黄八丈織物は、「本場黄八丈」の名称で伝統工芸品に指定され、伝統工芸産業法の適用を受けることになった。以後全国各地から注文が寄せられている。

現在養蚕が行われていないため、黄八丈織の原料となる生糸はすべて内地から買い入れられている。糸の染色は、榎立にある、3軒の黄八丈染物店で、古来の草木染の手法により行われている。妻里の矢堀たまをさんは、次のように説明してくれた。

ミンナ トーキョーカラ クルカラ、イトガ。ムカシャー カイコオ
 カッタジャ、ウチデ。ダレモ カイコオ ヤシナワナイカラ。モーイ
 クネンカ ジューナンネン₁モ一*。ヨソノ クニカラモ クロ ワ
 ケ、コノ イトガ。サイタマトカ カイコオ ヤシノウ トコロガ
 アルダロー。ソリエー ソメヤデ ソメルダ ヨ、ウグワン ソメヤ
 ガ サンゲン アルカラ サ一。シトワチセンエンジャ キカナイダ
 一。ソメチンカラ ヌ一 タカクナッテ イトモ タカク ナリ一。
 *₁モのように左下につけた₁はやや強く発音されていることを示す。₁モであれば
 極めて強いことを示す。

糸がみんな東京から来るから。昔は、家で蚕を飼ったでしょう。もう十何年も誰も蚕を飼わないから。この生糸というものが、外国からも来るわけです。[また]埼玉とか、養蚕地があるでしょう。それを、染屋で染めるのです。あの様に[染糸を指しながら]。染屋が3軒あるからさ、[染賃が]1束の糸につき千円ではきかないでしょう。染賃からまたねえ、高くなって糸も高くなり……。

染屋から戻った糸は、ワナ《わな。ヒトワナ、フタワナと生糸の束を数える》になっているのでそれを、あく^{アタクヌキ}抜き、糊付けの後、ワク《枠。木の枠組でできた立体的な糸巻》に巻き取らなければ、それから先のオリジマツ《織る準備》ができない。枠に糸を巻き取る作業をイトクリ《糸繰り》といい、もう自分では機織りをしなくなったおばあさん達の仕事とされている。前記の話者矢堀さんも、イトクリをしながら、筆者の訪録に応じてくれた。また、筆者が昭和54年8月に榎立を訪れた際、公民館の前で出会ったあるおばあさん（当時81歳）も、糸繰りをしているとのことであった。その時収録した筆者との会話をのせてみよう。

F81: ハラ ハチジューイチ マダ イトクリ シテマス ヨ。

筆者: シマコトバデ ハナシテ タモーリヤレ。

F81: (笑) コドモガ タンゴ。ウチノヨメ ノァ クァーン
ナガーク オビオ、ヨソノグァーモ クレバ ニケンサンゲンガニ
イッション ナルトア、ヒャクワナ チカクモ ナル ドァイテノ
ァ。ターイヘンドァ ジャ。(笑) ウエデモ オルシ コドモノ
ウチーモ アチコチ イッテ イトクリヨ。オカチャンノ タメニ
タスカロワッテ オーワライ。

「もう81。まだ糸繰りしてますよ」

「島言葉で話して下さい」

「子供がタンゴ《着物地》[を織っています。] うちの嫁はこんなに長く帯を織っています。[私は] よその家の糸も繰るし、2軒3軒分も一緒になると、100わな近くにもなるので、大変ですよ。上の家でも織るし、[ですからその家の分の糸繰りもし] 子供の家にもあちこち行って、糸繰りをして。お母ちゃんのために助かると言われて、大笑い」

3) その他

榎立でかつて行われ、現在全く姿を消してしまったものに、炭焼きと養蚕がある。

炭焼きは榎立においては比較的新しく興った産業で、大正中期以降一般に広まった様である。終戦後、木炭の供出割り当てがこの地区にも多く課せられて大変であったという。盛んに炭の焼かれていた時期もあったが、昭和45年頃にはその煙も絶えてしまった。

養蚕については、前記の矢堀たまをさんが往時を偲び、次のように語ってくれた。

ムカシワ カイコオ ヤシナッテ ターイヘンダッタ ヨー。コド
 モガ チーサイトキ、ニー。クワボァ モッダリ、ソイカラ ヤメ
 ャー クワボァ モギー イッター。オーカゴー ミツネー イクダ
 カラ。モギー、イエゴー、イエ。トラック、デー。トラッカー ヤク
 バデ ダスカ、ラー、ダク。カニャー ダスタイドン。ソレニ ニ
 ンゲンモ ノッテ クルドアイテ ノァ。クワバガ アツク ナル
 ドァ ノァ、ノッテキヤール ドアイテ ミンナー。ムカシヤー
 ノァ イトミャーダ。ソイカラ タネミャーダッテ、ターイヘンダ
 ッタ ヨ。カイコオ ヤシナウト マーユガ アルダロー、イトシク
 ノデ イソガシクテ ヒトツキグリャモ ヤスメテアー ミンナ
 ソダッタ ヨ ミンナドコデモ。イソガシクテ。

昔は蚕を飼って大変だったよ。子供が小さい時に。桑葉をもいだり、それから山へ桑葉をもぎに行ったり。大賀郷、三根へ行くのだからもぎに、永郷（八丈島の北部。八丈富士の西・西北・北側）へも。役場（後で聞いた所によると農協でトラックを出したとの事）でトラックを出してもらったから楽だった。〔トラックの〕費用は〔各自で〕出したけれどもね。そのトラックに人間も乗って帰ってくるからね。桑葉が〔むれて〕熱くなるんだね。みんな一緒に乗って帰るのだから。昔はね、糸繭だ、それから種繭だと、大変だったよ。どこでも忙しくて。蚕を飼うと繭ができるでしょう、その繭から糸を引く²ので忙しくて。〔養蚕で忙しい時は学校はヨーサンヤスミ《養蚕休み》となり〕ひと月位も休めて〔子供も手伝った。〕みんなどこでも忙しくて〔大変でしたよ。〕

黄八丈織物の項で前述した如く、樫立では第二次世界大戦前には糸繭生産が盛んであった。江戸時代から糸繭生産は黄八丈織の第1作業段階の「糸ごしらえ」として位置づけられていたが、大正期以降は黄八丈織の生産が振わなくなるとともに、糸繭はその大半が業者によって買い上げられるようになっていった。

八丈島における養蚕の内地のそれと異なる点は桑葉の与え方にある。ここには内地に見られる様な桑畑はない。カノキジョ《桑畑》と呼ばれる所に植えられているカノキ《桑の木》にも施肥、整枝、剪定は一切行われて

いないので、カノキジョは桑林の様な外観となっている。桑の木は庭木としても植えられ、又切替畑にヒャーノキと共に混植される事もあった。八丈島の気候が桑の木の生育に適しているためか、放置しても伸長が早く、やがて喬木となる。クワバ（カビャーとも）《桑葉》はこの様な桑の木によじ登ってモッデ《もいで》来て蚕（古くはコナ、コナサマと呼ばれた）に与えられた。八丈島においては、昔からは枝ごと桑葉を与える方法は行われなかった。戦後、省力飼養法しゅうりきしやうほうとって桑葉を枝ごと与える方法も導入されたが坂上では普及しなかった。

坂上においては、坂下におけるよりも養蚕が盛んであったので、檜立の人々は檜立地区の桑葉を取り尽くしてしまうと坂下へ、更に遠く永郷の方まで桑葉をもぎに行かなければならなかった。言い換えれば、他地区と違い天草等テンクサの水産物で多くの収益をあげる事の出来ない檜立の人々は桑葉不足を承知の上でも、少しでも多くの蚕を飼い繭を売る事によって、懸命に現金収入の道を図っていたのであろう。「桑葉を三根まで買いに行った」との発言も聞かれたので、もいだ桑葉の代金はヤマ《畑・山》の持主に支払われたのであろう。その桑葉をトヱラ《俵》に詰めて、戦前は主に牛ウシ（役牛ツキアヘ）の背、戦後はトラック等で持ち帰った。途中で桑葉がむれて鮮度が落ちるのが一番心配な事であった。

八丈島の気候が温暖多湿のために桑が早く芽をふくこと、施肥をしない天然桑の葉による飼育なので病害の発生が少ないこと、八丈島の春の暖かさがハルゴ《春蚕》の生育に適していること、等の理由で、八丈島は昭和10年頃より種繭の産地として有望視され、檜立においても養蚕試験所の指導のもとにタネゴ《種繭になる蚕》が多く飼われ始めた。戦後復活した養蚕にもこの傾向は続き、更に発展してハルゴ《春蚕》として飼われる蚕のほとんどはタネゴとなり、糸繭となる蚕はナツゴ《夏蚕》かアキゴ《秋蚕》としてタネゴより少なく飼われる様になった。昭和30年からは、空輸による種繭の出荷も始まった。八丈島では母屋ボウエの居間や寝室をサンシツ《養蚕室》にあてていたので、タネゴを飼う場合には、母屋にめばりをしてホルマリン消毒を行うなど糸繭の蚕の場合より細心な注意を払わなければならなかった。

昭和40年頃から種繭の生産は急速に減少し、昭和45年を過ぎると、全く行われなくなった。一方糸繭は、自分で織る分の糸を作る目的でその後も生産が続けられていた。坂下では現在も数軒の家で飼われているそうだ

が、榎立地区ではそれも程なく終りを告げ今日に至っている。

参考までに榎立出身の磯崎乙彦氏著『八丈回顧』8頁より榎立村の産物の項を引用する。

産物。移出しているものとして昭和10年、煉乳・バター・木炭・肉牛・繭・柿・椿油・黄八丈・しょうが・球根類。昭和25年、バター・木炭・肉牛・豚・繭・椿油・しょうが・球根類・ロベレニー類・キャベツ等蔬菜・西瓜・薬草・とび魚。

牛を中心とした畜産も以前は盛んであった。世界的にも優秀な乳牛、肉牛の仔牛が育成されていた。しかし現在では僅かしか飼育されていない。また牛乳を榎立の集乳所へ出荷しているのは、2軒の農家にすぎない。集乳所へ出荷された牛乳は他地区の牛乳とともに大賀郷地区の農協の工場で農協牛乳、八丈バター等に加工されている。

柿の実を拾ってその種から油を絞ることは昭和40年頃から行われていない。

榎立地区には焼酎工場があり、「島の華」という銘柄の焼酎が作られている。

漁業従事者は10名であるが、天草・飛魚、等の漁期にのみ、働き手として他地区で行われる漁に参加する。

3. 榎立の食生活

1) 現在の食生活

前項の ミーンナ クニノモノカ カッテ タバタレ に見られる様に、現在の榎立の人々は主食の米を始め、調味料、小麦粉、食用油、乾物・乾めん類、ジュース・菓子類、生鮮食品の一部、等を内地からの移入にたよっている。しかし八丈島の近海は魚の豊庫であるので、時期時期に、アオムロ《むろあじ》、ハルトビ《はまとびうお》、ナツトビ《あかとびうお》、アオゼ《あおだい》、アブキ《とこぶし》、メットー《ぎんたかま》等の新鮮な魚貝類が供給されることはいうまでもない。野菜は大抵の家で自家用にネリ《おくら》、ピーまん、なす、里芋、大根等が栽培され、オリ《石垣》の上などには、ヤータバ(ヤタバとも)《あしたば》⁹⁾が植えられていて食用に供されている。八丈産の農協牛乳、八丈バター等も新鮮なものが入手可能であるし、西瓜、パッション、バナナ等、八丈産の果物

もその時期時期には潤沢である。今日人々の食生活は多様化しているの
一概には言えないが、樫立における食生活は大変豊かであるとみることが
できよう。

2) 昔の食物

樫立の最年長者である東六里の間仁田もとさん（明治21年生まれ）の話
された事をもとにして昔の樫立の食生活を振り返ってみよう。昔と一口に
言うのは、江戸末期から明治、大正、昭和の初めまでは、ほぼ同じ様な物
を常食していたと聞くからである。

アサケ《朝食》とヨーケ《夕食》には、ゾーサー（ゾーシーとも）《雑炊》
とくに里芋雑穀等と呼ばれる麦入りの雑炊を主食として食べていた。それ
の料理法は、先ず麦を煮ておいて、別の鍋でイモまたはサツマのクァーヨ
ムッテ《皮をむいて》刻んだものを煮る。この時鏝などの塩辛をだしとし
て入れるとおいしい。煮え上がってきた時に、煮てある麦を入れ、自家製
の麦味噌を溶き入れ少し煮込む。更にヤータバ、大根、カブラ《蕪》等の
葉やアダミ《あざみ》のネジコ《新芽》をタタイテ《細かくきざんで》入
れて煮上げる。ヤータバを多く入れて作った雑炊をヤータバゾーサー、ア
ダミを沢山入れて作った雑炊をアダミゾーサーと呼ぶ人もいた。夕方、大
鍋一杯のゾーサーを作りヨーケとし、残りを翌朝アサケとする家も多かつ
た。

これらの炊事に使う水はもとさんの若い頃はまだ鉄管の水道ができてい
なかつたので、ヨーダケ《大竹、〔部落上方の水槽から竹樋で各家まで水
が引かれていた〕》からの水を水がめに入れて使った。（明治20年頃までは
各家の娘や主婦が水汲場〔地下水を溜めてあるところ〕まで行き、水を汲
み、オキエササッデ《桶を頭に乘せて》家まで運んだ）

ヒョーラ《昼食》には、イモかサツマのニョアゲ《煮上げ》を食べた。
ニョアゲはイモやサツマを皮つきのままウシヨ《海水》又は塩水で煮た
《茹でた》ものをいう。イモ、サツマを洗う時にはイメンゴと呼ばれるざ
るに入れて水の中で振って洗う。それを大鍋で茹でる時にイモやサツマの
上にニエバ《煮え葉》をかぶせ更にその上に小さめの鍋ぶたを置いて茹で
る。ニエバには樫立地区では主に大きな羊歯の類、はちじょうかぐま、オ
ニシダ《おにやぶそてつ》等が用いられた。このニエバはイモやサツマが
茹で上ると茹で汁と一緒に捨てる。茹で汁を捨てずに海水をつぎ足し、つ

ぎ足しして用いる家もあった。一昔前まではどこの家でも女の人が毎日海へウシヨクミ《汐汲み》へ行ったもので、昔の水汲み同様桶を持って康政里の乙千代ヶ浜までおりに行き、海水を汲んでそれをササッで来たそうである。

このニョアゲイモに好みで、シオカロァ ツケテ タベトァ ダラ、ラー《塩辛をつけて食べたんだ》と言う人もいる。

副食としては、大根^{ジャーク}を作ってコーコー《たくあん》に漬けておいた。鰹^{カヅ}が手に入った時は刺身として食べた。なお、鰹の内臓からは上等な塩辛ができた。島では醤油は作られていなかったの、味噌^{ベラ}をカブツ《橙》のしぼり汁で溶いて酢味噌を作り刺身につけて食べた。今でもそうして食べることが多い。トビヨ《とびうお》の獲れる時期にはそれを買って身を開き、一晩塩水につけて干してアマ《天井の上》にしまっておいた。もとさんが子供の頃、極立に豆腐屋が一軒あってヘーマー《へえおじいさん》と呼ばれた人がトーフオ ヒータ《石臼で大豆をひいて豆腐を作って》いた。

米飯は一般には盆、正月、普請、祝い事の時しか食べられなかった。もっとも、もとさんの実家では父親が埼玉県の川越出身の鍛冶職で、三度の米は欠かしたくない、と家族にも米飯^{メシ}を食べさせたので外よりは贅沢^{ヂェタク}であったとのことである。昭和も10年代に入ると、朝と晩には米飯^{メシ}や麦飯^{ムギメシ}を食べる家も多くなった。その様なメシやムギメシがつく朝食と夕食をそれぞれアサメシ、ヨーマシと呼んだ。昭和16年、米が配給制になり、普通朝食と夕食にはメシがつくようになり、アサケ、ヨークという言葉もしいだいに使われなくなってきた。メシのおかずは、味噌汁^{ミソジュ}、里芋汁^{イモジュ}、薩摩芋汁^{サウモジュ}等でこの場合は麦は入れないが塩辛等で味つけをした。魚の身などが入ると大変おいしかった。魚貝類はもともと豊富であったが、この頃には牛肉等も食べるようになった。カキナという菜はあったが、白菜はなく、ねぎもあまり作らなかったので、肉は大根と煮つけることが多かった。

特別の食べ物としては年の暮に、四角い木の枠に竹の竇^アをはめて作った蒸籠^{モウロ}でもち米をふかして仲間を組んで共同で餅^{モチ}をつき、その餅を正月の9日には椿油で揚げて食べるのが楽しみだった。揚げた餅をアブラーゲと呼んだ。もち米の中にサツマを入れてサツマ餅もついた。

おやつとしては朝茶菓子と夕茶菓子の2回をとるのが一般的でサツマを主に食べたが、トーギミ《とうもろこし》のとれる時期にはトーギミのニョアゲが喜ばれた。キミ《きび》をサツマジョ《薩摩芋畑》の所々に少し

ずつ作って、それをセーロでふかし臼でついてキミダンゴを作ったこともあった。臼でつくものにはイモヅキもある。これは本来里芋のごりごりした所などを食べよくするための料理法であったが、食糧事情がよくなると、イモとサツマを合せてついたりして茶菓子とした。

果物では、コージと呼ばれるみかんの小型で甘い種類のものが成り珍重された。今ではあまり作られていないが島瓜シマウリと呼ぶ、まくわ瓜を大きくしたような形で、薄緑の皮に包まれた瓜があり、その果肉は白く柔かくて香りは良いが、味はあまりない。これをお年寄が好んで食べた。子供の夕茶菓子にはコーセン《むぎこがし》やキミガンシャ《砂糖きび》も与えられた。子供たちはキミガンシャを噛み噛みテッポーバ《鉄砲場。幕末に黒船打払いのため鉄砲の射撃訓練をした所。その跡が妻里にあった》でツノヅキ《牛角力。戦後GHQの命令で禁止されるまでは毎年盆にテッポーバで行われた》を見るのが楽しみだった。

3) イモ・サツマ

樫立の人は「里芋と薩摩芋を」または「里芋か薩摩芋を」と言うところを、イモサツマオと一口に言うことがある。ヤミャー イコトキノ ヒョーラモ イモサツマデ《畑仕事へ行く時の弁当も里芋か薩摩芋で》という言い方もする。里芋と薩摩芋が共によく食べられて、重要な食料であった事がこのイモサツマという複合語に象徴されているように思われる。

イモと言えば里芋のみを指すことからもうかがえる様に、里芋は昔から八丈島にあったと言われている。現在はナンキン、グンニャーと呼ばれる2種類の里芋が普通栽培されている。ナンキンの方が、人々に好まれる。

グンニャーワ ツブリノホーガ ウマゲジャ。コワ ネッコケイテ ノァ。《グンニャーは親芋の方がうまいよ。子芋(タネとも言う)は小さいからね》とのことであるが、グンニャーはナンキン程多くは栽培されていない。グンニャーの里芋の茎は赤い。現在、里芋はしょうがの味を少しつけて醤油とだし汁で煮つけられ副食とされることが多い。

一方、サツマは島に在来のものではない。初めて八丈島に伝来したのは、八丈実記所収の八丈年曆抜書(「八丈実記」緑地社版 第3巻 昭和46年刊行 464頁より474頁まで)によれば享保8年(1723年)である。将軍から薩摩芋種を差遣わされたが、栽培法に不慣れなためすべて枯らしてしまったという。享保11年に再び芋種を下賜された時には、樫立村の名主が命に

よって栽培を試み、他村にもそれを広めたとのことであるが、その頃から食用に供されていたか否かは定かでない。「八丈実記」にはまた、くだって文化8年(1811年)に大賀郷名主の菊池秀右衛門が新島から赤薩摩を、翌9年にその息子小源太が内地からハンスという芋種を持ち帰った。これらの薩摩芋は初めは風土に合わなかったが、栽培方法が改良されつつ広まっていき、40年後島内・小島・青ヶ島^{ヨシボ}・^{オシガシ}島^シまでにも繁茂し、島民の飢えを救っているとも記されている*。

*('八丈実記'緑地社版第1巻(昭和39年刊行)380頁及び第6巻(昭和47年刊行)416頁参照。)

この栽培方法の改良については筆者は昭和47年に当時の八丈島教育長、小宮山才次氏より教示を受けたことがある。小宮山氏の説明によれば、タネバ《薩摩芋の苗床》において苗の育成がなされるようになって初めて大量の苗を得ることができ、それを広面積へ植付けられるようになったという。それ以前は薩摩芋の蔓を西風の当たらない暖い場所にある畑で越冬させて翌年の芋種にしたので、多くのタネ《芽》を得ることができなかった。タネバは屋敷内の母屋^{ボヤ}から見える所に設けられ椎の葉の堆肥等を施されて、たえず細心の注意が払われていた。現在薩摩芋は、焼酎の原料以外の目的にはほとんど作られていない。

6～7月は、1年のうちでイモ、サツマの穫れない時期である。この時期に備えてクラ《高倉。ねずみの害や湿気を防ぐため4本乃至6本の柱で床を高く支える様にして建てられた倉》に大麦^{オムギ}を貯えた。サツマは生のまま輪切りにして穴をあけソーカ《あおのくまたけらん》の茎を裂いたものを通して軒下にさげて乾し、キンボ《生干し芋》として貯えた。このキンボは煮てキンボジルにしたり、また粉にして水で溶いてふかし、キンボダンゴにして食べた。煮たサツマを切って干したものはネンジと呼ばれた。トーギミ《とうもろこし》が島に導入されてからは、サツマジョ(ジクモジョとも)《薩摩芋畑》のシエギ《端》、畑の中の所々に2、3本ずつ、トーギミを植え夏の食糧とした。あまりトーギミを沢山植えるとサツマジョの日当たりが悪くなり、サツマの収量に影響するので、沢山作ることではできなかった。小宮山氏の話では、ジャガ《馬鈴薯》が樞立で作られるようになったのは、明治の末からであったとのことである。ジャガは、5、6月頃に収穫でき、夏期のイモ、サツマの不足を補った。夏の食糧不足でナツヤセ《夏やせ》をしていた人々がジャガを収穫できるようになってから

夏やせをしなくなったという。

4. 檜立の衣と住

1) 衣類

檜立の人々のキルイ《衣類》は現在内地のそれと全く変りがない。男のお年寄りにはトレーニングウェアを着てゲートボールを楽しむし、女のお年寄りも着物を着るのはモッチャク《面倒》だからと冬でも洋服で過している人が多い。若い女性は日常洋服を着て、フリージア祭り等の観光的行事には黄八丈を着、成人式^ウ、結婚式等には内地製の縮緬^{ちりめん}、綸子^{りんず}等の振袖を着るのが一般的であるようだ。

ただ、オヤリ《屑繭をほぐし指でよって作った糸》で織った紬製の半天^{ヘンテン}を羽織っている人を見かける時、また自分で白の綾に織った地に模様を内地で染めさせ、娘さんの晴着を拵えたという人の話を聞く時、ここが織物の里であることを改めて認識させられるのである。

なお、現在ではほとんど用いられていないが、昔は晴着をマダラ、普段の着物をへべら（へびらとも）呼んでいた。履物としては、昔はジョーリ《菓草履^{グサ}か下駄^{ゲタ}（古くはボックリと言った）を履^{ハッテ}いていた。

2) 住居

檜立の住居には、現在でも内地一般と異なる点がある。それは八丈全体にいえることであるが、瓦屋根と土壁をもつ家がほとんど見られないということである。これは、瓦や壁の原料となる土が八丈島にないためと、風雨激しく湿気の多い気候に対応するためとの2つの理由からであるといわれている。

戦後建てられた家もその例にならっている。現在檜立に多く見られる住居は木造平家建てで戦前からの古い家を改築したものである。

昭和30年頃撮影されたという当時の民家の写真によれば、当時の家々の屋根は勾配の急な茅葺屋根で軒は低く、必ず縁側^{エッジ}で囲まれている。

縁側は濡れ縁となっているものもあり、また雨戸がたてられるようになっているものもあるが外側にガラス戸はついていない場合が多い。縁側と部屋は障子で仕切られている。部屋は奥の間^{オクノマ}《家の中心で来客用、寝室として用いられ、畳敷き^{ツツノ}》と外の間^{ソトノマ}《普通板敷きでイドと呼ばれるござが敷

いてある》と2部屋が横に並んでいる。外の間にはカマドと呼ばれる囲炉裏が切っており、家庭のだんらんの場となっている。

ジャードコ（ジャードコロ、コックバ。古くはスガキとも）《台所》は外の間の裏手にあり、多くは張り出しとなっている。この様な家が一番小規模であり、もう少し大きい家には、^{フカノ}中の間や^ノチョーダイ《納戸、奥の間の裏側にある、それに^{センノ}縁の間《畳敷きの廊下》がついていた。

これらの家屋を改築する場合は、元のままの座敷を中心にしてそのまわりで玄関や広縁や台所、便所等を座敷より一段下げて付け加える例が多い。台所はプロパンガスのガステーブルとステンレスの流し台、電気冷蔵庫、食器棚等を置いてかなり広くしてある。外まわりの建具として棧をペンキ塗りにしたガラス戸を入れるが、最近ではさらにそれがアルミサッシに替えられている。家が広がった上に外まわりの軒先をある程度高くしなければならぬので、一般に波形トタンの寄せ棟作りに直された屋根の勾配は大変ゆるやかになっている。

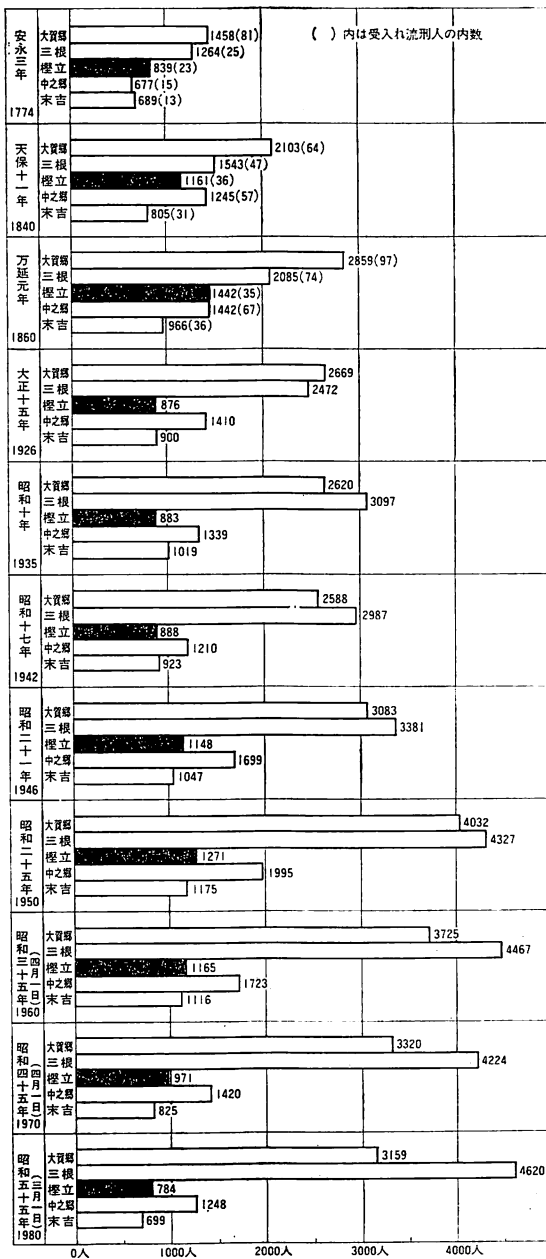
昔は^チョーズバ（カンジョーとも）《便所》は外便所で^ノ屋敷の門《扉のない入り口》近くにマヤ《牛小屋》と隣り合せて建てられていた。

個々の家の敷地は、樫立の起伏の多い地形の制約を受けて、坂下におけるように四角形に近い形とは定まらず、裏手に山のある場合はそれを防風壁とし^{サツマ}前方にのみ^{オリ}石垣を築きその上にカザグネ《防風のために植える木々》として^{ツバキ}椿などを植えてある。屋敷内には、配置は様々であるが、ポーエ（ポーヤとも）《母屋》、^{クラ}高倉、^{インキョジヨ}隠居所、エノコ《家の子。小屋。隠居所を含めて呼ぶ時もある》等が建てられていて、それらの建物の南側の空き地、等に^{ニヤ}庭^{ツヨ}処と呼ばれる畑があり、母屋から見える所に必ずタネバ《サツマの苗床。前述》が設けられていた。現在は高倉は物置きとして残っている家があるが、2、3の農家を除いて牛小屋はない。隠居所は改築して水洗便所等をつけ、お年寄りが住んでいる。また機織りや切り葉の作業場として利用されている場合もある。

5. 変化の中の人と暮し

1) 江戸時代から現代まで

P.23 の人口推移グラフ⁵⁾を見ながら、江戸時代中期から現代に至る時代の変化を、人口の増減とその理由を考察することによりとらえてみよう



第4図 5地区の時代別人口推移対比図

う。

安永3年 安永3年から遡ること8年、明和3年から4年間続いたコンキュー《飢饉》のため、八丈島全体で1000人近くの餓死者を出したという。榎立村の餓死者は他村に較べ少なかったといわれる。江戸中期においては、最も人口の激減した時期である。それ以前より、八丈島は人口増加による慢性的な食糧不足に悩まされており、台風の通り道にあるという不利な気候条件も加わって、江戸時代を通じ幾度かの飢饉に襲われた。明和の飢饉は中でも最大のものであったといわれる。

天保11年 享保年間に八丈島に導入された薩摩芋の栽培がようやく普及し、これにより島民の食糧事情も好転してきた。そのためか人口の増加がみられる。

万延元年 天保11年にみられる様な人口の増加傾向が続いている。江戸時代における八丈島各村の人口の中に、各村に割り当てられた本土よりのズニン《流刑者》も含まれていることは、特徴的な事柄である。

明治時代～大正時代初期 この期間については『八丈人口史』のグラフに各村別の記載がないが、簡単にまとめてみる。明治時代に入っても、流刑者が漸次内地へ送り帰されたこと以外には、榎立村の人々の生活上の変化はあまりなかったといわれる。すなわち、イモサツマを主食とし、租税として黄八丈織物を内地へ納める（明治42年まで）暮らしは、江戸時代より大して変わらなかったし、又江戸時代に幕府御用船の御船預り役として権勢を誇った服部家が、明治大正の時代になっても榎立村の最大の地主として依然として村の中心的存在であった。

しかし、近代化の波は徐々に八丈島にも及び、船による内地との交通は少しずつ頻度を増してゆき、明治末期には月一回の定期航路が開かれて、生活物資もある程度は運ばれてくるようになった。また、明治10年、榎立小学校が設立され義務教育⁹⁾も行われるようになった。

江戸時代後期より増加を続けていた島の人口は、明治時代中期にはすでに飽和状態に達した。耕地が少なく、農業しか産業を持たない榎立村においては、特にこの人口増加の問題は深刻であった。一方時期を同じくして、政府も小笠原諸島、南大東島等の島々の開発経営に力を入れ、明治20年に横浜―八丈―小笠原を結ぶ年4回の定期航路を日本郵船に開かせるなどして、八丈島民の移住を奨励した。そこで、榎立地区でも、一家を挙げてこれらの島々へ移住していった人が多かったという。八丈島民の小笠原

諸島への移住は、明治19年より始まったが、移住者は増加を続けて明治末期には小笠原諸島民の大半を八丈島出身者で占めるようになったという。さらに、明治32年からは南大東島への移住が始まり、移住者は砂糖きびの栽培、製糖等に従事してきた。

第一次世界大戦後、パリ協定によって、サイパンを初めとする南洋諸島が日本の国際連盟委任統治領となり、同時に東京―八丈島―小笠原―南洋諸島を結ぶ日本郵船の定期航路が開かれると、八丈島民の移住は南洋諸島へとその範囲を広げていった。

大正15年 この年にみられる人口の大幅な減少は、前項で述べた島々への移住が原因のひとつであると思われる。

昭和10年 人口は依然として増加していない。引き続き、南方、南洋諸島への移住が行われていた故であろう。

昭和17年 昭和16年12月、太平洋戦争がすでに勃発し、樫立からも続々と出征兵士を送り出した。南方の島々への移住のため、あるいは召集されて、島を離れる人々を見送りに、オヤコ《親子・親類》・ホービャー《友人》たちは、三根の神湊港か大賀郷の八重根港へ行って別れを惜しんだ。アバヨー――イ。ヒッカスルナヨー――イ。オモワヨー――イ。《さようなら。忘れないでね。思っていますよ。》と声の限りを尽くして呼び交わす声は、互いの姿が見えなくなるまで続いたという（小宮山才次氏の話による）。

昭和19年夏、サイパンの日本軍が全滅し、グァム、テナヤンも米軍に占領された。これらの地域に移住していた日本人は、抑留されて敗戦まで収容所に入れられたり、米軍の監視下におかれたりした。

一方八丈島は、南洋諸島の陥落後、本土防衛の第一線として小笠原に次いで防衛が強化され、19年5月に、島内から召集された約300名からなる現地部隊が結成された。内地からも混成旅団や、南洋諸島へ出撃予定であった部隊が投入された。樫立には北海道出身者を中心とする平田部隊が配置され、樫立小学校が接収されて部隊本部となった。20年春には、全島で2万7千人近くの兵士が駐屯していた。兵員は、米軍の敵前上陸を想定して守備を固めるべく、飛行場の建設、三原山山中への高射砲の設置、防衛道路の建設、海岸線における砲台の構築等に当たっていた。20年4月に、内地に縁故者のない島民1300余名が南軽井沢へ強制的に集団疎開させられた。最後の疎開船東光丸は、米軍の攻撃を受けて沈没し、樫立からは1名

の犠牲者を出した。疎開した人々は、疎開先の南軽井沢で、食糧不足に悩まされながら開墾にあたった。また、樫立出身の当時大賀郷小学校長であった小宮山才次氏を中心として疎開先に八丈学寮が作られ、子供達の教育がなされた。同年10月、八丈島へ引き揚げた。

昭和21年 出征兵士を含め、南洋諸島及び小笠原諸島、南大東島等に移住していた人々も八丈島へ引き揚げ始めた。昭和22年、三原中学校が新設された⁷⁾。

昭和25年 前述の引き揚げ者の帰島のため、樫立の人口も凶のように増加している。南方の島々から引き揚げてきた人々の中には、移住先の島々で生まれ育った青少年も含まれていた。これらのいわゆる二世のうちには、樫立ことばは理解できるが、自らは家庭内でも外でも樫立ことばを用いない人もいる。また南方の島々からの帰島者を中心として、キャベツ、サヤエンドウ等の、端境期栽培が行われるようになり、東京方面の市場に出荷された。昭和29年、八丈島—東京間の定期航路が正式に発足。昭和30年5ヶ村が合併し八丈町が誕生した。

昭和35年 キャベツ等の栽培は内地でビニールハウス栽培が発展したため、それに押されて伸び悩んだ。東京方面に就職離島する人が増えて人口は減少している。一方島を訪れる観光客は増加し始めた。昭和37年、樫立中平の故磯崎八助氏⁸⁾が中心となり、八丈島接岸港建設促進連盟が結成され、その努力が実り、昭和41年底土接岸港が完成した。当時は黒潮丸496トンが毎月7便就航していた。昭和43年に大坂トンネルの改修工事が完成している。

昭和45年 高度経済成長のもと内地へ人々が流出し、樫立の人口も減少を続けている。大学進学者も増加した。昭和46年より、ふりいじあ丸2300トンが日曜日を除く毎日就航するようになった。同年坂上の電話もダイヤル化した。それまで八丈島—東京間の電話は申し込んでから平均1時間もかかってやっと通話ができるという状態であった。筆者が初めて八丈島の土を踏んだのは昭和47年6月であったが、この時、既に八丈島は一大変革をとげた後であったので、昭和45年夏にふたたび訪れた際には、7年前と較べてあまり大きく変化したという印象を受けなかった。ただ、発展の度合いが進んだという印象だった。

2) 服部屋敷と観光

榎立地区の川城羅に、江戸時代幕府の官船の差配一切をまかされていたお船預り役の一人服部氏が代々居住していた屋敷がある。お船預り役には、名主よりも高い権限が与えられていたので、榎立村の村民達は服部家に対し尊敬の念を抱いていた。その様子を磯崎乙彦氏は次のように述べている。

榎立の服部は、近代化の波に勝てなかった。明治時代に榎立の三分の二の地主だったというが、そのすべてを失った。だからといって、服部家をとやかくいえるものではない。世は移り変わるものだからである。徳川時代に服部家は頭角を現わし、お船預りとなって財を蓄えた。川城羅の丘に邸宅を築き栄華を誇ったが、戦時中に一族離島し、再び帰ってこれなかった。このいわれある服部屋敷を、慧眼の伊勢崎久光氏が入手した。

私は幼時の頃から服部屋敷へ遊びに行った。ここに玉石垣があるが、これを築くために湯浜から玉石を運ぶ人は、白い飯にありつけるのを楽しみにしていたという。飯の盛り役の一人に祖父の代八郎がいた。いつも山盛りに固く盛るので評判がよかったという。近藤富蔵が築いた石垣、大里をまねた玉石垣、蘇鉄の生えている広い庭、遊ぶにはこと欠かなかった。

ここに母屋があり、小座敷に私と同年生まれの成博君の祖父がおられた。伝統ある名家の最後を飾る人だけに、貫禄もありいかめしい方であった。私の出生はよくないが、孫の遊び相手なので寛大に扱って下さったようであった。ここを訪れる人は土に膝をつき、丁寧に挨拶をする。主人は廊下に立って受け応えするという異様なさまがみられた。(中略)

ある日のこと、わが家の前の通路で成博君と遊んでいた。そこへ一人の老婆が来て、行き過ぎたかと思ったら引き返してきて、「あなた様は服部のこだんな様ですか」。成博君がうなづくと、「この様な所であえて嬉しく思います。」といて深々と頭をさげた。「では失礼します。」いずれも方言⁹⁾で言って、まるで拝むようにしてその場を立ち去った。私には一瞥を与えず、完全に無視されていた。成博君はそんなに偉い人なのかと、複雑な気持で見っていたものであった。このよう

に、旧家には重みがあったのであろう。(磯崎乙彦著「八丈回顧」7頁)

この服部屋敷ハツトリヤシキの跡は、今ではそこで演じられるカンタテオドリ榎立踊りと八丈大鼓ヘチゾーダイコで知られる島内有数の観光名所の一つとなっていて、毎日運行されている島内定期観光バスが観光客を、邸前まで運んでくる。

昨今、八丈島では、官民一致して観光事業に力を注いでいる。榎立地区においても、八丈温泉ホテルの外に民宿は6軒を数える様になり、夏期にはそれらが満員の盛況となっている。八丈土産品の専門店もある。個人タクシーも含め、タクシー会社が、地区内で5軒もあると聞く。これらのタクシーは、島民の足でもあるが、無論観光客の利用も多い。また、乙千代オツチヨヶ浜ケハマに海水浴場が、八幡山ハチマンヤマに遊歩道が設けられるなどして、観光のための海山の整備が進められている。

3) 内地及び島内他地区との交通の発達

昭和55年の時点で、東京羽田空港と八丈島空港との間を、全日空のYS11型機(64席)が1日6往復している。片道の飛行時間は約60分である。名古屋空港とも1日1往復している。又、東海汽船の「すれちあ丸」(3700トン)が東京港竹芝棧橋と八丈島底土接岸港(風向きの関係で八重根港に入港することもあるが、その場合は接岸できずはしけを使用する。)の間を、夏期には毎日、冬期には月2回休航する外は毎日就航している。航行時間は三宅島経由で片道約10時間である。

江戸時代には、幕府の御用船による年2回の往復が内地との交通のすべてであった。それが現況に至るまでには、島民の悲願がこめられた発展の歩みがあり、それは決して容易なものではなかった。

今日の盛んな内地との交流は、榎立地区の人々にも種々の影響をもたらしたと思われる。その一つとして、東京とその周辺都市を大変身近に感じるようになったことが挙げられよう。若い人々は、そのほとんどが東京方面へ進学就職する様になり、そのため、嫁不足、黄八丈の織り手の後継者不足等が心配されている。もっとも、ここ1、2年は内地での学業生活や就職経験の後、榎立に戻る若い人も僅かながら増え、大方の愁眉を開かせている。東京から嫁を迎えた家も2、3軒あると聞く。

一方輸送力の増加は、園芸作物等の内地への出荷を容易かつ迅速にするとともに、食料品、電化製品等の内地からの流入を促したので、榎立にお

いても現代的な生活様式が広くゆきわたった。例えば便所は水洗に改造されつつあり、電話・自家用車もほぼ全戸に普及している。

島内交通の面では、昭和43年の大坂^{オオサカ}トンネル（明治40年開通。それ以前は急峻な山坂に阻まれて、大賀郷榎立間の往来は困難を極めたと言う）の改修工事の完成が、画期的な出来事であった。改修後は、道路も整備されたので、榎立を經由して三根、末吉間を往復するバスの運行数も1日5往復と増え、他地区への往来が更に容易となった。榎立の人々にとって、町立病院への通院（榎立には医院、薬局がない。）、空港や港への送迎のための外出はもとより、通勤通学の便も良くなった。

4) 全島融合の時代へ

古来八丈島の人々は、村単位でまとまり、ややもすれば他村とは孤立して生活を営んできた。それ故、各村独自の言語、気質等が保持されてきたといわれる。しかし、今日では行政・経済・教育のいずれもが、全島規模で運営される様になり、必然的に、榎立の人々も他地区の人々と交流し協同して社会生活を営まざるをえなくなった。その結果、戦後に生まれ育った人々の言語生活が変化し、これらの青少年の間では、榎立に固有のことばはほとんど用いられなくなった。この傾向は若年層へ行く程顕著である。例えば、保育園において筆者が園児の会話を収録したところ、園児たちはほとんど共通語といってよいことばを交わしていた。また、小学校校庭で遊んでいた生徒達の会話も収録したが、保育園児よりは幾分榎立ことばの要素を多く含む程度で、共通語といってさしつかえないことばが交わされていた。中学生になると、三原中学において中之郷地区の生徒と一緒に学ぶことになるので、中之郷ことばの影響も少なからず受けるようになると言われている。また、テレビが特に子供達の言語生活に多大な影響を及ぼしていることは、言うまでもない。

他方、高校¹⁰生以上の青年の間に島ことばを使おうという気運が起こりつつあることも見逃せない。その場合用いられることばは、坂下^{サカノ}（大賀郷・三根）の島ことばの影響を色濃く受けたものの様である。大賀郷は古来島の行政の中心地であり、現在は三根と並び商業も盛んであり、また空港の所在地でもある。三根は最も商業が盛んな所であり、底土接岸港が、島の玄関口ともなっている。このような事情を考えると、坂下の言語が坂上の言語に影響を及ぼすのも当然のなりゆきであろう。

5) 樫立の人々の気質

樫立の人々の気質をうかがい知るために、2、3の文献から樫立に関する記述を拾ってみよう。

近代元服決シテコレナシ。タゞ樫立村ノミ平常ハ万事ヨク儉ヲ守リテ凶歳ニモ困セズ、元服祝ハ毎戸必ス一村ヲ招キテ、酒宴ニキヤカニ古風ヲ失ナラス。(「八丈実記」緑地社版第6巻(昭和47年刊行)368頁)

樫立村では、明治三十年代に養老會が組織された。この方面では明治以降の先鞭をつけたものと村の人々は自負してゐた。毎年四月三日に七十歳以上の老人達を招待して御馳走をし土産物を贈る。出席出来ない人へは「持ち膳」を配る。女子青年團の事業としてなされ、敬老會と呼ばれるやうになった。(大間知篤三著「八丈一民俗と社会」昭和26年刊行180頁)

1922(大正11年)に中平部落の^{コーチガシラ}耕地頭(現在の^{ジッコウイイン}振興委員)に選出された磯崎八助氏は、坂下酒造会社の鉄管工事に従事した沖山秀司氏を招き、部落内の測量経費の見積りなどを相談し、部落のひとつには水道の利点を説得して、現在の樫立小学校の校門の南下方にコンクリートの水槽をつくり、そこから各家へ鉄管で導水することを計画した。樫立地区では、最初のことではあるし、そのうえ費用もかかるので、着工するまでには反対者もいて、足並みがそろうまではたいへんだったらしい。いちばん問題だったのは、費用の捻出方法だった。それには中平部落の全戸(約20戸)を財力別に(約10等級)区分して、費用を徴収し10年間で返済することにした。(1戸平均約23円・当時の日当が30~40銭ぐらい)

こうして、いく多の困難を乗り越え完成してみると、いままでの樋とは比較にならぬほど便利で、その威力におどろいた。水道の利点に感激した部落のひとつたちは、当初10年間で返済すべき費用を3年間で返済してしまった。最初の2年間で各戸とも5円返済し、3年目は、部落の人が共同して荒地を開墾し、さつまいもを栽培した。それを焼ちゅうの原料として全部酒屋におさめ、その代金で残りの経費を全部

返済してしまった。

この中平部落の水道施設に、各部落も刺激され、大正12年(1923年)には康政里、江能里部落の一部と向里部落が、大正13年(1924年)には、東六里部落と江能里部落の残りの一部が、それぞれ部落の上方まで土管で導水し、コンクリートの水槽をつくり、そこから各戸へ鉄管や亜鉛管で導水した。こうして大正11年(1922年)の中平部落を皮切りに、約6年間で檜立地区のほとんどの家に鉄管で導水された。費用の捻出方法は、各部落により多少相違はあったが、ほとんどの部落は、中平部落が行った等級制を取り入れた。

こうして大正末期から昭和初期にかけて、近代化したこの地区の水道は、その後、鉄管の取り替えや、土管の手入れ(漏水防止の補強)など、若干の修理や改良が加えられたけれども、町村合併後簡易水道に改善されるまでは、ほとんど変わらなかった。(八丈町教育委員会編著「八丈島誌」昭和53年再刊、652頁)

檜立の村会は各委員会に分かれ、その活躍は顕著なものである。昭和23年に貯蓄実践郷に指定され、他の3ヶ所と共に広く紹介された。尚、いかなる選挙に於いても投票率は100%に達する。(中略)

対外的な問題となると全村まとまって当るが、村意識があまりにも強すぎるのではないか。

本村には他村にみられるような無灯火屋は一戸もない。ラジオ聴取率は33%、他村は12%以下。新聞購読率は77%、他村は71%以下である。中学建設について、他村に先がけて村民総会において組合立を決議したり、本村のみが3歳以上の幼児を入れる保育園を設けたり、高校に行けない者の為の文化塾を開いたりしている。学校と青年団が協力して文化面の向上に努めている。(昭和25年現在)(磯崎乙彦著「八丈回顧」8頁)

以上の記述から浮かび上がってくる檜立の人々の生活態度は、今日にも受け継がれているように思われる。檜立の人々について矢堀たまをさんは次のように語っている。

カシタテフ ヒトワ マーヅメダラ、メンナ。ミーンチ コリヨ オ
 ルカ ドコカ ココカ ツトメルカ、シトリモ アソブ ヒトガ
 イ。ツトメンノット ドコーカ ハタラク。イカラ キューサイジギ

ョーノ ヒトワ ゴロクニンドアガ。ミクミ アルヨ、クミガ。マ
 ニダグミト カシワカグミ、ソレカラ ウエノヤマ。アチコチ タ
 マッテ ミクダロー。ミチヨ ツクツタリ、ベンジョノ アノ
スイセンニ コシラエルジャ、アノ ホッター。ダカラ イソガシ
ージャ、カシタテノ ヒトワー。

榎立の人はみんなまじめですよ。みんな〔婦人達は〕これを〔黄八丈を〕織るか、どこかに勤めるかして一人も遊ぶ人はいない。勤めない場合には、どこかで働く。それから〔東京都の〕救済事業に出て働いている人は5、6人だが、組（土木工事請負業者）が3組ありますよ。間仁田組と榎若組それから上ノ山組。あちこちで頼まれて働き廻るでしょう。みち普請をしたり水洗便所用の穴を掘ったり。忙しいのですよ、榎立の人は。

コッチノヒトワ カクテノ ア チヨキンクミアイテ イッテ、ジブ
ンモ スコシズツ ハイッテ アロガ、チヨキンクミアイッテ イッ
テ。ムジンニ ハイッテ アル ヒトデモ コッチノヒトワ ツブレ
ナイヨ。カタイカラ。

榎立の人は堅くてねえ。自分も少しずつ入っているが、貯金組合と
 いて無尽に入っている人でも、榎立の人は堅いのでつぶれないで
 すよ。

コッチノヒトワ ハタラカンニヤ アラレナイダロー アダン。コ
ドモー ガッコイ ダイガク イレル、チニカノ クルシーカラ
ノ。

榎立の人は、働かずにいられないでしょう、どうしても。子供を大
 学へ入れるとか何とかで〔家計が〕苦しいからねえ。

次に伊勢崎正一氏（商店経営。昭和22年より2年間村長を務める）より
 聞いた榎立の住民総会についての談話を要約して記す。

住 民総会は、自治会主催で年1回2月11日に全世帯から代表者が
 コミュニケーション
 公民館に集まり、町会議員諸氏を招き、生活改善等あらゆる住民の意
 見を出し合う。一人数分と、発言の制限時間が定められているが、発
 言は活発で、内容はまじめによく考えられたものである。正午すぎに
 開会され、4～5時間続けられ、その日の夜は大宴会となる。総会

は、大正の初期に始まり、以後毎年行われている。昭和55年には165名が集った。

先に挙げた「八丈回顧」8頁の引用文中にもあるような、地区民がみな一致団結して事に当たる気風は、住民総会が今も活況を呈していること、青年達が下記に示す表のごとくに活動していること等をみると、立派に現在に受け継がれているという印象を受ける。

夏期対策日定表 檜立地区青少年協	
1. 座談会関係	
◎7月12日	夏期対策についての座談会 (各関係機関との話し合い)
◎7月下旬予定	青年団座談会
◎9月上旬	夜間パトロール反省会
◎9月下旬	夏期対策の反省会
2. 広報活動関係	
◎7月下旬	お知らせ配布 (夏期注意事項を配布)
◎7月12日	立看板の設置(6ヶ所) (裸で街を歩かない呼びかけ)
◎7月中旬	海水浴場の注意表示板 (立札 3ヶ所 その他 2ヶ所) 乙千代ヶ浜海水浴場の見取図設置
3. 非行化防止及び海難注意関係	
◎7月下旬～9月上旬まで	夜間パトロール実施 各団体参加 15回予定
◎7月中旬～9月上旬	乙千代ヶ浜海水浴場へ随時パトロール実施

前述の敬老会は、今日では、9月15日に女子青年団と婦人会の共催で行われている。一方、老人達自身によって運営されている福寿会(福寿クラブとも。普通はよく老人会と呼ばれている)も結成されていて、毎月1回の会合がある。フレクチ《連絡係》、オチャパン《茶菓当番》等も廻り持ちとなっている。会合のある日の午前中は地区内の小広場や檜立小学校の校庭でゲートボールの競技をし、午後は公民館の畳敷の広間で会食をしながら歌や踊りを楽しむ。向里の佐藤さとるさん(明治27年生まれ)は、筆者に

「85歳の歩み」と題して老人会のメンバーである喜びを綴った文を寄せられたので、その中から数節を書き出してみる。

明治・大正・昭和と生きて、
苦勞苦勞の数々よ。
山猿姿で働いて、
涙を飲んだ日もあった。

時の流れに沿いながら、
 長の年月頑張つて
 此の仕合せにめぐり合う。
 今第一の楽しみは、
 老人クラブの集りに
 仲よし老友が笑顔そろえ、
 公民館の三階で
 今日をこそと若返る。
 ここは我らの憩いの場、
 公民館に咲く花は
 爺や婆やの花御殿。

「ガーマンシテ ハタラッテ ハタラッテ 《頑張つて働らいて働らいて》
 のちに皆でドーシン 《一緒に》ヨサッテ アスブ。《集まって楽しむ》。
 ここに樫立の人々の真骨頂がうかがえるのである。

第1章注

- 1) パッションは南米ブラジル産の多年生のつる性の植物。和名時計草は、その花を時計に見立ててつけた名である。ピンポン玉大のやや楕円形の果実をつける。果実の色は灰色がかった茶色を呈し、その殻状の皮を切り開くと中に黄色い果肉が種子にからまって入っている。その果肉は、独特の香りがあり甘酢っぱい味とする。
- 2) イトヒキ《糸引き》とは、繭を飯釜や鍋で茹でながら、繭から糸をタテテ《糸口を見つけて糸を引き上げて》普通約35個の繭からの糸をツズミと称する金具を通して1本の生糸にまとめて引き、座繰り《糸巻きの枠をはめて回転させる道具。片手でハンドルを回すと、歯車の働きにより枠の回転が速められる》で枠を回転させながら巻きとる作業をいう。
- 3) ヤタバは、伊豆七島、房総、三浦、伊豆、紀伊半島の沿岸地帯等に生えるせり科大形の多年草。高さは1mに達し、茎は直立し上方で分枝する。葉は大型で切り込みがあり、表面につやがあり、冬でも青々としている。茎や葉を切るとうすい黄色の液汁が泌み出る。強い草で、葉を切り取ってもまた明日すぐ若葉が出てくるというので「あした葉」と名付けられたといわれる。
- 4) 樫立においては、成人式は帰省者の集りやすい1月5日に行われている。
- 5) グラフを作成する上で参考にした前掲の「八丈回顧」(40頁～47頁)の『八丈人口史』の項では、各村別の人口が記載されている年は、昭和17年まで

は、安永3年、天保11年、万延元年、大正15年、昭和10年、昭和17年の各年のみであるので、これを取りあげた。戦後昭和21～27年の間は、毎年各村別の人口の記載があるが、終戦直後の昭和21年と昭和25年を特に取り上げた。

『八丈人口史』は昭和27年の時点で書かれたものである。それ以後昭和35年、昭和45年、昭和55年の各年は、筆者が八丈町役場の住民課で調べたものを参考にした。

- 6) 檉立小学校以外の教育機関として、小学校に付設されるという形で、温習科（のちに補習科と呼ばれる）が明治時代から設けられていたという。又、大正15年各五ヶ村に青年訓練所が設置され、昭和9年、青年学校と名を改め、昭和23年廃止されるまで存続した。
- 7) 昭和22年中之郷、檉立、末吉の3地区合同で新設。翌23年末吉地区は、分離独立して末吉中学校を新設。以来、中之郷、檉立両地区を学区として現在に至る。現校舎は、昭和27年に中之郷地区の檉立地区に近い所に建てられたものである。なお、新制中学発足以前は、八丈島には旧制中学はなかった。
- 8) 磯崎八助氏は、明治21年檉立村に生まれる。元檉立郵便局長。「八丈回顧」著者磯崎乙彦氏の父君である。生涯を通じて檉立村及び八丈島発展のために力を尽した。
- 9) この老婆の言葉は次のようなものであつたらう。

オミヤーフ ハットリノ コダンナサマデ オジャリヤロ カ。
 クグランドテ トコロデ オヤーシテ ウレシク オミーターソ ガ。
 ソイジャー シツリーシートソ ガ。

服部家の人に対して檉立の人々は最上の敬語を用いたという。服部家の存在が檉立の言葉遣いをていねいなものにしたという説もある。

- 10) 八丈島には唯一の高校として都立八丈高校がある。この高校の前身は、昭和23年に大賀郷に発足した都立園芸高校八丈分校である。この分校に、昭和24年、定時制も設けられ、坂上教場と坂下教場の2ヶ所で授業が行われ、坂上教場は三原中学におかれていた。昭和25年、八丈分校は都立八丈高校に昇格した。さらに昭和30年には、三根に昭和25年から開校していた明治大学付属八丈高校を吸収合併した。昭和37年に、定時制坂上教場は、八丈高校定時制坂上分校に昇格した。全日制にはこの年、家庭科が新設された。昭和44年、大賀郷の本校の鉄筋校舎建設工事がすべて完成し、分校もここに吸収され現在に至っている。

檉立の中学卒業者のほとんどはこの八丈高校に進学している。島内に大学はないので、八丈高校の卒業生で進学を希望するものは、内地の大学に進む。